

故郷第一場面 読んだ読んだ

三年二組 氏名

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、わたしは帰った。……（中略）……なじみ深い故郷をあとにして、わたしが今暮らしを立てている異郷の地へ引越さねばならない。

主人公は二十年ぶりに帰郷し、片時も忘れなかった故郷を期待していたが、実際の故郷は活気がなく、寂れていた。それを見た主人公は寂寥の感を覚えたが、「もともと故郷はこんな風だった」と、気持ち無理矢理ごまかそうとした。



主人公は帰郷した。その道で空模様は怪しく、冷たい風がヒューヒュー。情景が主人公の寂寥の気持ちを表している。故郷はこんな風ではなかった。片時も忘れることのなかった故郷が、がっかりするようなものであったため、主人公はレベルを落として「もともとこうだった」と自分に言い聞かせ、寂寥の感をごまかしている。主人公は、「別にいい」と思っているから、中国はダメになると考えた。

主人公は別れを告げるために帰郷した。そのため、足取りは重かった。空模様は怪しくなり、鉛色の空の下から、暗い感じで故郷を訪れたが、

故郷は小さいころの思い出からは想像できないほど活気がなく、寂寥の感を覚えたが、それを認めることができず、ごまかそうとしている。

主人公は、二千里も離れた故郷に帰郷するのだが、二十年前に比べて故郷はわびしくなり、少しの活気もない村々を見て、知らず知らず寂寥の感がこみ上げた。この寂しさを消すために、主人公は「昔からこんなもんだ」と無理矢理思い込ませることによってその気持ちをなくそうとした。このようなことを思いながら、「今度の帰郷は決して楽しいものではないのだ」といつて自分をごまかしている。

主人公は約一千キロメートルも遠く離れているところから帰郷した。故郷に近づくにつれて空模様が怪しくなったり、冷たい風が吹いたり、暗い情景から寂寥の感がこみ上げた。

二十年間離れていて片時も忘れなかった故郷は、もっと美しかったはず……よく考えたら、やはりこんな風だったかも知れない。進歩もない、寂寥もありはしない。心境が変わっただけ。そう感じた。

主人公は、帰郷の際に、「怪しい空模様」「冷たい風」などの状況で寂寥の感を覚え、わびしい村々を見るとその心情が強くなった。それに対し、主人公はもともと、片時も忘れることのないほど良い場所で会った故郷を否定し、もとからわびしい場所であったと自分に言い聞かせることで、胸にこみ上げた寂寥の感さえも否定している。

さん

さん

さん

さん